

勇美記念財団

平成 20 年度 市民講座アンケート集計報告

本財団では、一般市民の在宅医療への理解を促し、その啓蒙・普及に貢献するため、「市民講座」の開催を支援しています。平成 20 年度に助成を行った 16 の市民講座において、参加された方々にアンケートにご協力いただき、皆さんが在宅医療や介護に対してどのような意識を持っているか、また、自らの最期についてどのように考えているか、調査をいたしました。ここに、その結果をご報告いたします。

【助成対象となった市民講座】

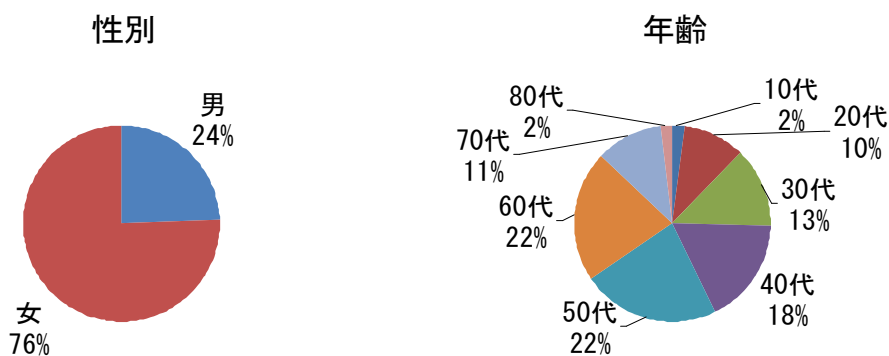
- 障害のある子どもの生きる力を育てる子育てのポイントは何か
(平成 20 年 9 月 24 日・千葉県・在宅ケア研究会(長生・夷隅)主催)
- シリーズ「自宅で看取るという事」
(平成 20 年 9 月 27 日ほか・大阪府・吹田ホスピス市民塾主催)
- 週末健康カフェ「医者にかかる前の健康術 ～住み慣れたまちに暮らし続けるために～」
(平成 20 年 11 月 9 日・岐阜県・まちの家赤坂宿準備室主催)
- 緩和ケアを学ぶ市民講座
(平成 20 年 12 月 7 日・福島県・特定非営利活動法人福島県緩和ケア支援ネットワーク主催)
- 脳卒中のリハビリテーション
(平成 21 年 2 月 11 日・大阪府・大阪府理学療法士会泉州ブロック主催)
- わたしのエンディングノートを書いてみよう
(平成 21 年 4 月 3 日ほか・三重県・「終わりよければ」いせの会主催)
- 介護技術セミナー 古武術バージョン
(平成 21 年 4 月 19 日ほか・東京都・NPO そらとびねこ主催)
- 在宅介護の「現実」と、介護の「希望」づくりを目指して
(平成 21 年 5 月 19 日・神奈川県・となりのかいご、社会福祉法人一廣会共催)
- 家で死ぬということ ～住み慣れた我が家で最期まで～
(平成 21 年 6 月 13 日・北海道・北斗クリニック主催)
- 家に帰ろう！暮らしを守り続ける医療
(平成 21 年 7 月 5 日・千葉県・NPO 法人千葉・在宅ケア市民ネットワークピュア主催)
- この町で健やかに暮らし、安心して逝くために
(平成 21 年 7 月 10 日・東京都・NPO 法人白十字在宅ボランティアの会主催)
- 排尿排便障害の自己管理と在宅介護の実際
(平成 21 年 7 月 11 日・沖縄県・排尿排便の自己管理と介護を考える沖縄の会主催)
- 市民と共に考える在宅医療・福祉社会
(平成 21 年 7 月 25 日・埼玉県・一般社団法人統合医療福祉中村直行研究室主催)

- 在宅医療セミナー ～在宅で何ができるの???～
(平成 21 年 8 月 19 日・東京都・医療法人社団さくらライフ主催)
- 家庭医による在宅医療
(平成 21 年 8 月 23 日・京都府・日本プライマリ・ケア学会主催)
- 全身性障がい者の地域生活と非侵襲的人口呼吸療法
(平成 21 年・千葉県・任意団体リターンホーム主催)

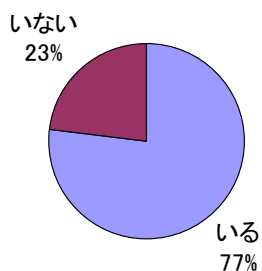
1. 参加者の概要

参加者の男女比、および年齢層は昨年と変わらず、女性が4分の3以上を占め、年齢も 40～60 代が中心でした。大阪府理学療法士会泉州ブロック主催「脳卒中のリハビリテーション」においては、男性の参加者が女性を上回り、年齢層も 20 代から 70 代まで非常に幅広い層の参加がありました。

また、介護している対象者の有無についての質問では、昨年と比べて「いない」という回答がやや増えて4分の3以上を占めています。一方、小児の在宅医療をテーマに行われた在宅ケア研究会(長生・夷隅)主催「障害のある子どもの生きる力を育てる子育てのポイントは何か」においては、参加者の9割が女性で、その半数近くが介護経験者であり、自らの問題として強い関心を持っていることがうかがわれました。



Q 介護をしている対象者はいますか



2. 介護の実態

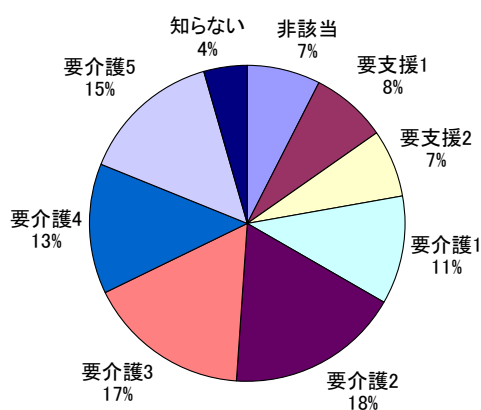
続いて、実際に介護をしている方へ、その実態についてさまざまな質問を行いました。

①対象者との関係、介護度、療養場所など

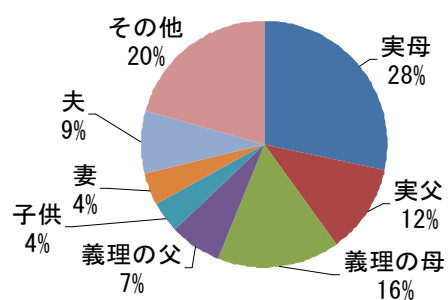
まず、介護の対象者は「要介護2」が18%と最も多く、また、「要介護3」以上が半数近くを占めています。対象者は昨年度同様、「実母」が最も多く、「実父」、「義理の母」、「義理の父」と続いています。「その他」という回答には、兄弟や祖父母、義理の兄弟などがあるようです。

介護している場所については、「自宅」が昨年度より増えて61%と最も多く、続いて「介護施設」22%、「入院先」7%となっています。介護の期間は「5年以上」が4割近くを占め、「3年」、「1年」と続いており、長期の介護を経験している人が昨年よりも増えている傾向がうかがえました。

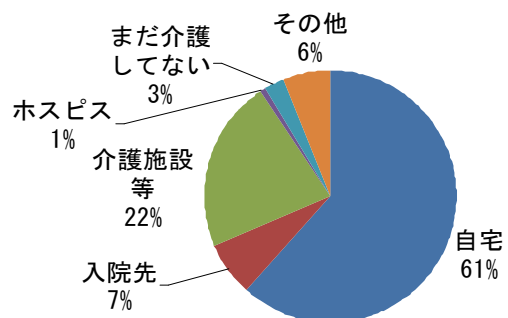
Q 対象者の介護度は？



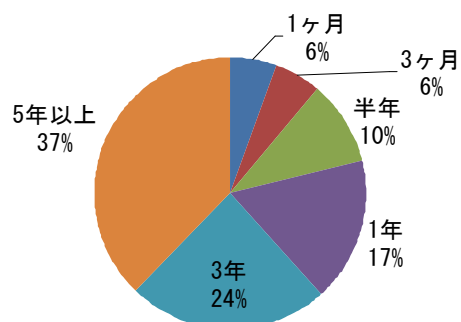
Q 対象者との関係は？



Q 介護している場所は？



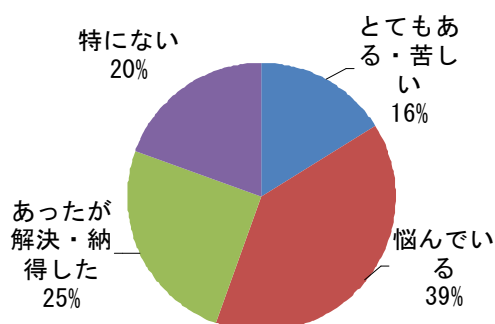
Q 介護の期間は？



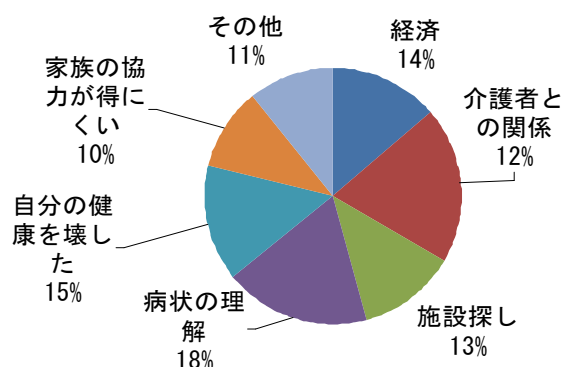
②介護における困難、および介護に不可欠な事項について

実際に介護をしていて感じる困難に関する質問では、「とてもある・苦しい」または「悩んでいる」との回答が半数を超えています。一方では、「あったが解決、納得した」という回答も、昨年度の同調査よりもやや増えました。困難の内容について最も多いのは「介護者との関係」です。また、「病状の理解」「自分の健康を害した」「経済」「施設探し」など複数回答も多くみられることから、介護の現場における問題は実に多様であることがうかがえました。

Q 介護していて感ずる困難は？



Q 困難の内容は？

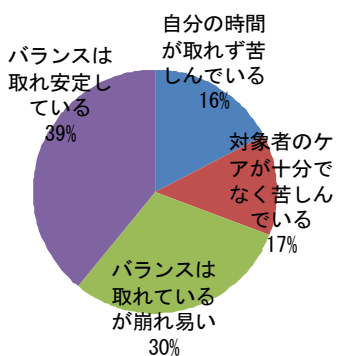


対象者のケアと自らの生活とのバランスについては、昨年度よりも「バランスが取れ安定している」という回答が増えて 38%、「バランスは取れているが崩れやすい」も含めると7割近くが一応のバランスを保っているという回答でした。一方では、「自分の時間が取れずに苦しんでいる」という回答も多く見られました。

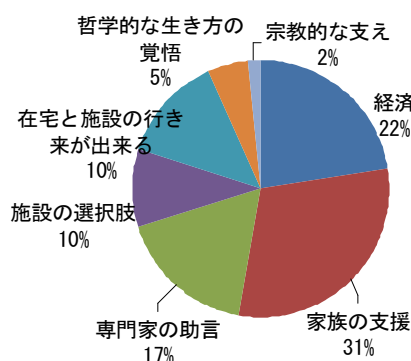
また、介護と自分の生活の両立を助けるものについては「家族の支援」が昨年度の調査同様に最多。ほか、「経済」「専門家の助言」「施設の選択肢」「在宅と施設の様子ができる」といった回答も多く、自らの生活との両立にはさまざまな条件が必要であることが示されました。

さらに、「介護している対象者がどこで最期を迎えることを希望しているか」という問いについては自宅が約6割と最も多く、「わからない」という回答も少なくありませんでした。

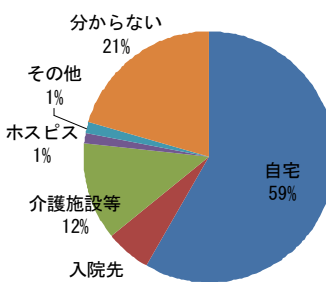
Q 対象者のケアとあなた自身の生活のバランスは取れていますか？



Q 介護と自分の生活の両立を助けるものは何ですか？



Q 対象者が最期を迎えるのに希望している場所はどこですか？



3. 自らが介護される場合について

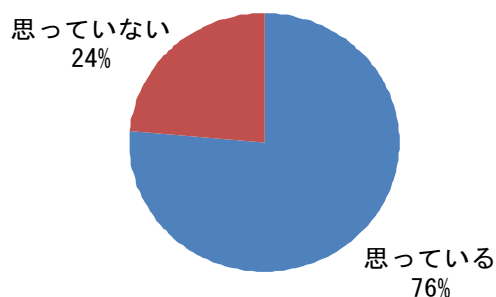
続いて、自分自身が介護される立場になった場合について、質問を行いました。

まず、「自分が要介護になることを予測し、不安に思っていますか」という質問に対しては、「思っている」が76%と圧倒的に多く、最期を迎えるのに希望する場所については、「自宅」が約6割を占めました。ただし、20～30代の参加が多かった白十字在宅ボランティアの会主催「この町で健やかに暮らし、安心して逝くために」では、「不安に思っていない」という回答が多く、若い層ほど、「介護される自分」を実感として想像しにくい面があることがうかがえます。

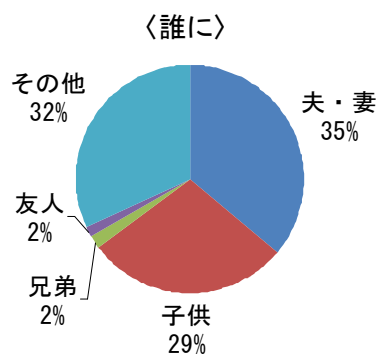
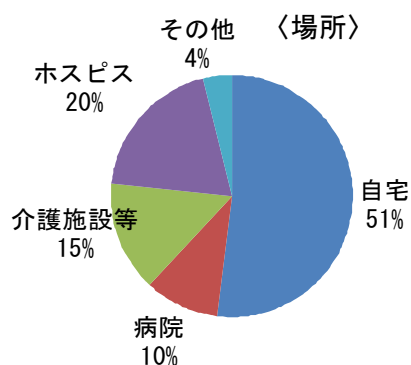
また、「誰に介護をして欲しいか」という問いについては、昨年度同様「夫・妻」あるいは「子供」という回答が最も多く、約3分の2を占めています。一方で「その他」という回答も多く、親族などよりも専門職による介護を望む傾向があることも推測されます。

費用については「心配」が半数以上を占め、「わからない」を含めると大多数が経済的に不安感を抱いていることがわかりました。

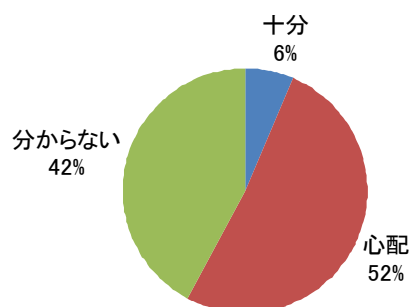
Q 自分が要介護になることを予測し、不安に思っていますか？



Q 要介護状態になった時、最期を迎えるのに希望する場所は？誰に介護してもらいたいですか？



Q その場合の費用は？



4. 今、一番必要としていること(自由記載)

最後に、「今、あなたが一番必要としていること」を自由記載で挙げていただき、以下のような意見が寄せられました。

●必要な医療・介護サービスを受けられる体制、システムの必要性について

「障害者や病気の方、高齢者などに対し、本人の希望に添うように家族は支援したいと思っているが、それを支えるシステム、あるいは人材が揃っておらず、一人(一箇所)に負担が集中しやすいと感じている」

これは介護経験者より寄せられたコメントです。今回のアンケートでは、このような「安心して十分な医療・介護を受けられる環境、システム」を求める声が、数多く寄せられました。具体的には、ホスピスや訪問看護の充実、頼れる病院が近くに欲しいといった意見や、それら医療機関と行政、介護サービスとの連携の必要性を訴える声、そして、そのような連携により「自宅や病院、施設間の行き来がしやすい環境」を求める意見です。

また、「全国各地の在宅医療がどのように行われているのか詳しく知りたい」、「要介護状態になった時に必要な医療・介護サービスについて、料金も含めた十分な情報が必要」など、医療や介護サービスに関する“情報”の必要性を指摘する意見も見られました。

さらに、「介護保険制度が今後、どのように変わっていくか、自分が要介護状態になった時に、必要なサービスを受けられるのか心配」「在宅医療を受けることになった時、具体的に費用がどのくらい必要かを知りたい」など、現在の制度への疑問や不安、あるいは経済的な不安に関するコメントも、昨年度の調査同様、非常に多く寄せられています。

●周囲の理解や心の支えの重要性について

「医療の説明をしてもらうよりも、まずは“気持ちを受け止めてもらうこと”が大切だと思う」

今回のアンケートでは、上記のコメントに代表されるように、単に病院や施設といったハード面の充実を望むだけでなく、「気持ちを受け止めてもらう」というソフト面でのサポートを求める意見も目立っています。「不安を本音で話せる人の存在が必要」、「死ぬこと、生きることについて家族と一緒に考えたい」など、気持ちを共有、共感しあえる対象が、病気や死と向かい合う上では欠かせないということを、多くの参加者が強く感じているようです。

また、このことは介護される側だけでなく、介護をする側とっても同じで、“介護者の心のケア”の必要性についても多くの指摘がされています。「祖母の介護を見ていて、介護している家族のサポート(特に心の面)が必要と感じた」「自分なりに十分な介護をしているつもりだが、そ

れに対して家族の理解があれば、疲れも飛ぶと思う」などのように、ここでもやはり気持ちを受け止めてもらうこと、介護に対する周囲の理解という“心の支え”が非常に重要であることが示唆されました。

●自分に何ができるか、どうあるべきか、老いや死を主体的に考えるきっかけに

「(病気や障害を)自分自身の問題として捉え、理解する姿勢を持つことが必要」

「終末期に至った時の、心のあり方を学習したい」

「自分の一生を振り返る、ゆっくりとした時間が持てるように生きていきたい」

上記のコメントのように、自らの老いや死と向き合うことの大切さ、老いや死と向き合う上で心のあり方などについて、考えさせられたという主旨の感想も、多くの参加者から寄せられています。

また、「不安のない生活は無理であり、不安を抱えながらも生きていく勇気と心構えが必要」というように、病気や障害を抱えて生きることを特別なこととせず、自然なこととして捉え、自らの生き方そのものを問い直すようなコメントも複数、みられました。

「“自宅で最期を迎えたい”というと、家族に負担をかけてしまうという思いが強いが、今回の市民講座を通じて、家庭で終末を迎えることがどのようなことかを知ることができ、少しだけほっとしている。“自宅でも看取りが可能だ”ということがもっと実感としてわかってくれば、“最期は自宅で”と素直に言えるようになるかもしれない」

上記は、白十字在宅ボランティアの会主催「この町で健やかに暮らし、安心して逝くために」の参加者より寄せられた、市民講座への感想です。

周囲に迷惑をかけたくないという思いから、「最期は自宅で過ごしたい」とは簡単には言いにくい現実があるかもしれません。しかしこのコメントは、在宅医療がどういうものが具体的に見えてくれば、そのような抵抗感が多少なりとも払拭できることを示しています。

今回のアンケートでは、医療や介護への疑問や不安、経済的な問題など、さまざまな課題が挙げられました。在宅療養への不安感を取り除くには、何よりも在宅医療がどういうものかを「知る」ことが大切です。「安心して老後を迎えたい」という国民共通の願いを叶えるために、一人ひとりが老いや死と向き合い、身の回りの現状を自分自身の問題として捉え、問題意識を持つこと、それが在宅医療を普及させる第一歩とも言えるでしょう。そのような意識を持つきっかけづくりとして、市民講座が一定の役割を担っていることを、このアンケート結果は示しているようです。